

愛知用水資料としての『躬行者』

久野庄太郎『躬行者』総集編（1988年）は、愛知用水通水後の1962年10月（創刊号）から1971年2月（100号・最終号）まで、「躬行者」と題して久野庄太郎が毎月発行していた基本B5サイズ4ページの月刊紙の合本である。そこには愛知用水通水までのさまざまな思い出話が記されている部分があり、資料として貴重なものである。

そこで、本書に目を通し、愛知用水史に関わる記述がある号を記録し、その内容がわかるよう小題あるいは内容メモを記した。また、浜島辰雄による「まえがき」もまた状況を理解する重要な資料のため抜き出した。「まえがき」の最後には次のように記されている。「猶この復刻版三〇〇部は交友社社長田中賢氏の御好意により印刷御寄贈を受けたことを関係一同感謝申し上げます。」

書誌情報

創刊号『躬行者』10月号：1962年10月5日～第100号（最終号）『躬行者』：1971年2月5日

執筆並発行者：久野庄太郎

発行所：愛水館 1963年3月～

編集人：金山立夫

印刷所：交友社

発行部数：25,000部

購読料：1年200円

愛知用水史に関わる記述

第2号『躬行者』11月号：1962年11月5日：終生難忘「浜島辰雄先生のこと」

第3号『躬行者』12月号：1962年12月5日：躬行日記（水利観音）

第5号『躬行者』2月号：1963年2月5日：躬行日記（水利観音、鏡餅）

第6号『躬行者』3月号：1963年3月5日：終生難忘「水くみ」（水の苦労）

第7号『躬行者』4月号：1963年4月5日：終生難忘「水くみ」（旱魃）

第8号『躬行者』5月号：1963年5月5日：終生難忘「はさん」（『水利史談』「入鹿池」）

第12号『躬行者』9月号：1963年9月5日：終生難忘「なるほど」（古川佐一郎、山庫）

第14号『躬行者』11月号：1963年11月5日：躬行日記（水利観音）

第16号『躬行者』1月号：1964年1月5日：躬行日記（佐布里池着工式）

第20号『躬行者』5月号：1964年4月5日：終生難忘（佐布里池の水利観音設置用地）

第26号『躬行者』11月号：1964年11月5日：終生難忘「山崎先生を憶う」

第27号『躬行者』12月号：1964年12月5日：終生難忘「山崎先生を想う」

第28号『躬行者』1月号：1965年1月5日：終生難忘「愛知用水啓蒙活動」

第32号『躬行者』5月号：1965年5月5日：終生難忘（愛知用水運動）

- 第 34 号『躬行者』7月号：1965年7月5日：終生難忘（稲葉秀三先生）
- 第 40 号『躬行者』1月号：1966年1月1日：終生難忘「鏡餅」
- 第 42 号『躬行者』3月号：1966年3月5日：終世（ママ）難忘「友人」
- 第 44 号『躬行者』5月号：1966年5月5日：終生難忘「愛知用水」
- 第 45 号『躬行者』6月号：1966年5月5日：終生難忘「愛知用水②」
- 第 46 号『躬行者』8月号：1966年8月5日：終生難忘「山崎先生」
- 第 48 号『躬行者』10月号：1966年10月5日：終生難忘「吉田（茂）先生」
- 第 49 号『躬行者』11月号：1966年11月5日：終生難忘「愛知用水」（1948年）
- 第 51 号『躬行者』1月号：1967年1月5日：終生難忘「愛知用水 かがみもち」
- 第 52 号『躬行者』2月号：1967年2月5日：終生難忘「愛知用水 同志」／躬行日記「通水五年鏡餅奉呈を決す」
- 第 53 号『躬行者』3月号：1967年3月5日：終生難忘「用水と母」
- 第 56 号『躬行者』6月号：1967年6月5日：終生難忘「愛知用水ダム」
- 第 57 号『躬行者』7月号：1967年7月5日：終生難忘「愛知用水ダム」
- 第 58 号『躬行者』8月号：1967年8月5日：終生難忘「山崎延吉先生」（1928年の選挙）
- 第 59 号『躬行者』9月号：1967年9月5日：終生難忘「訪米一周年」（世界銀行にお礼）
- 第 60 号『躬行者』10月号：1967年10月5日：終生難忘「天香さん」（愛知用水から去る）
- 第 61 号『躬行者』11月号：1967年11月5日：終生難忘「一灯園」（愛知用水から去る）
- 第 70 号『躬行者』8月号：1968年8月5日：終生難忘「浜島辰雄さん」
- 第 74 号『躬行者』12月号：1968年12月5日：終生難忘「愛知用（ママ）の恩人」
- 第 79 号『躬行者』6月号：1969年6月5日：終生難忘「愛知用水」（発起の頃、鎌田吉一）
- 第 91 号『躬行者』5月号：1970年5月5日：終生難忘「愛知用水」（恩師）
- 第 94 号『躬行者』8月号：1970年8月5日：終生難忘「高松宮殿下」
- 第 96 号『躬行者』10月号：1970年10月5日：（巻頭下にNHKラジオドラマ「用水人生」フランクキー塚、宮田輝放送10/5～末日 5：30～5：45案内）
- 第 98 号『躬行者』：1970年12月5日：終生難忘「吉田（茂）先生」（桜井理事渡米後）
- 第 100 号（最終号）『躬行者』：1971年2月5日：躬行日記（年末鏡餅あり）

まえがき 浜島辰雄

昭和二十三年八月の暑い日であった。ところは、愛知郡豊明村の今の中京競馬場の附近の狭田の小道、先を行く久野さんは、例の作業服に、地下足袋、脚絆、それに頭には、「同行二人」と書いた編み笠、私は古地図と首びきで路線選定、私の地図に書き入れる線を見ながら、うつ向いた久野さんに「同行二人」とは誰ですか、と聞いた。返ってきた言葉は、「私の影です」私はハッとした。この自信、これだと思った。「これはできるぞ」と心の中で思った。久野さんに用水のことで会ったのはつい四、五日前、地図を整え、尾張富士から歩き続けて、第一日は小牧篠岡の伊藤告重さんの家で泊めて貰い、次の日は、県の森林公園の事務所泊るといった風で今日で四日目。地図には、標高四〇米を目標に知多半島に向けて、勾配を考え乍ら用水路線を書き込んでいった。

そこで、私は久野さんに「用水ができれば久野さん「どうですか」と聞いたら、「用水の出来る頃には私は生きて居れるかどうかは分らぬが、生きて居れば、きっと家の中で、完成式の煙火の音を聞いていますよ」そして、又続けて、「用水は誰が作ったか分らぬが良いものだ、後々の人が喜んで使ってくれば良いのだ。般若心経は誰が作ったか分らぬが、本当に良いお経だと後々の人が読んで居る。それでなくてはいかん、私は用水運動をやる前までは、山崎先生に教えられて丹念に日記を毎日書いていたが、用水運動をやるようになってから、日記を書くのは一切やめました。こんなことは記録に残すべきでない、どうやって作ったか分らぬ方が良い」といつて又歩き出した。

大体物ぐさの私は、そうだなあ、と感心するやら、性に会うわいと思いながら歩いた。

その日は大府に着いて、大府の山口治兵さん、鈴置理樹雄組合長、高井良雄専務など、同志と大いに語り氣勢を挙げた。

用水運動も板について、同志会運動から同盟会運動となると、運動の経過、方針、必要経費のことなど、どうしても報告しなければならない、時々例会に久野さんは何時の間にか丹念な報告を書いて報告された。

たどたどしい報告であったが、どうして要を得て筋が通っている。矢張り若い時から、書き続けてきた日記が物を云うたのだと私は感心しながら、思う事と現実とは儘にならず、あの忙しい中書くことは大変だろうと、感心するやら同情するやらであった。

後後、期成同盟会の会計報告を造って見たら立派なもので、昭和二十三年から七、八年のものを全部纏めたものが、愛知用水土地改良区の、どこかに有る筈である、一度探して見たいものだと思つて居ります。

しかし、私事に洩ること、自費出費(相当なものである筈)に関しては一切記録されなかった。矢張り、

あの時云われた信念は通して居られたのだなあと感心した。

昭和三十五年の暮に、当時の愛知用水公団の労働組合の委員長(高橋次郎氏) 副委員長(長滝退造氏)

何れも故人から、私と久野さんに、申し入れを受けた。それは、あなた方愛知用水地域の受益者は、愛知用水が完成して、その利益を受けて幸となり結構だが、私達愛知用水公団技術者八〇〇人は行き場が実は無いのです。それぞれ県や農林省から出向して来たのですが五年間の中に、私達のポストには、皆外の人がついてしまっていて、私達が戻ると大混乱を起すのです。何とか私達の行く先を探して頂けませんぬかとの事、勿論組合の性格上、幹部にお願いするには色々支障があるだろうから、それでは私が全国を探して上げましよう云うことになって、久野さんは二つの方向を考えた。その一つは海外援助のコンサルタンツ会社を造って、そこに相当量の人を収容できる。

それから、もう一つは、一年間に百億円位の予算で急速に開発を必要とする大国家的な仕事を見つけ様と、海外の援助会社は資金作りを考えて、息子の久野彦一さんに委せ、自分は、全国津浦浦を廻って、プロジェクト探しをやった。

何しろ、愛知用水をやつて、スッテラテンになって、自分の喰う事に困る程になり、何とか誰の援も借りずにい上つて来たところを、頼まれれば、越後からでも米掲きにとでもないが、自費で全国を廻った。土地条件が良ければ、ボス同志が仲が悪いとか、仕事が小さくて、間尺に会

わないで、遂に豊川用水を最適ときめて、大磯にとんで吉田さんに相談した。「寔に愛知県ばかりで申し訳ないがこう云う訳で豊川用水が一番良い、事務所もそのままが良いし」と申しあげたら、吉田さんは、「国のためなら愛知県だろうが、どこだろうが、構わない。誰に云えば良いのか、そうか浜口か、よし池田に話す」と云うことであった。海外援助の方も「イランが一番良い」と申しあげたら、「よし、千葉大使に早束手紙を書いてやるから」と云うことで大問題も片付いた。こう書くと寔につるつるとスキーでもやっているように、うまくゆった様であるが、その間の苦勞辛酸は並大底のものでなかった。破産から立ち上るだけでも、人並の仕事ではできないことであった。

其の時の仕事は、各地の開発の事情を悉く記録して人に話ができるようにしなければならない。

一つのプロジェクトを見る度に報告書を造られた。一切を記録に残さない決心でかかれた久野さんの用水運動も事志と違う方向に進まざるを得なくなり、光水漫録として、第一号は久野さんが直接執筆し、第二号は吉野川の計画を私が担当した。

中でも秀逸なのは、「愛知用水と臨海工業」、「佐布里池をつくりましょう」、「高潮防潮堤をつくりましょう。」でこれらは、皆実現して、日本の経済発展や、地域住民の幸の礎を築いています。こうなると、書かねばならぬ。本当のことを書いて、次代の発展を築いていかねばならぬという使命感の方が強くなって、私に語ってくれた最初の考えは感傷的なこととなって次から次へと発想が生れ、沸き出れるように第十二号が、愛知用水と不老会となって今の不老会が誕生した訳であります。

いづれ、光水漫録も、シリーズとして、発表しなければならないと思っております。

筒井栄太郎先生の「手辨当人生」、「いきがい仲間」を改めて読ませて貰って良く纏められたものだと感激したが、この間の光水漫録には及んで居ないように思いますので、何時かこれを補う必要があると思います。兎に角、日記も止めたと一度は宣言した人が、よくここまで書かれたものだと感心した。

要は情熱だと思った。光水漫録の第十二編の日付が昭和三十七年二月二十日付となっており、躬行者の第一号が昭和三十七年十月五日となり、ここに、それまでたまったエネルギーが、マグマの如く噴き出してきました。

或る人、曰く、「躬行者」、「急行車」だから止まらない。大したものだ、この情熱の発露が、段々百号に近くなる頃から百号で止めるんだ、と前々から宣言しておられた。

それが、百二号昭和四十六年五月（八年六ヶ月）まで続いた。その間、昭和四十一年三月より「不老会だより」が、躬行者(第四十二号)の付録として発行せられ、以後主として、不老会の機関紙としての機能を果たした。

躬行者百号より不老会だより(第四十五号)は「不老」と改められ、昭和四十六年六月五日発行の第百三号より「不老」として一本化発行せられ、その間今日まで満二十六年の久しきに汎った。

その結果、昭和六十三年十一月号が「不老」第三百十二号として脈々として、その精神が継がれてきた訳である。だから不老三百十二号というのは「躬行者」から引き継がれた記念すべき番号である。

昭和六十三年十一月十五日は久野庄太郎さんの満八十八才、第八十九回目の誕生日である。

この日を記念して躬行者の復刻版を編集することは、に意義深いことと思います。

その昔、農聖山崎延吉先生より、

「云うばかり書くばかりの世の中に

行って見せる 君はみ宝」

と賞讃せられた、久野庄太郎さんの残した筆の趾で、一人雑誌「躬行者」程、その人格を躍如として顕現しているものはないと思う。私は、その書かれた時代、場所に一番身近に居たものの一人として、その前後の、いきさつを綴ってはじめての言葉としたいと思います。

どうか、この炎の燃えるが如き記録が、いつまでも世に残り後のしるべとなることを願って止みません。

昭和六十三年十一月記

(公財) 愛知・豊川用水振興協会研究員 達 志保